

平成30年度第1回大村知事と語る会

- 1 日 時 平成30年7月27日（金）午後3時30分から午後5時30分まで
- 2 場 所 愛知県庁本庁舎 正庁
- 3 テーマ スポーツ大会等を通じた障害者の社会参加
～スペシャルオリンピックス2018愛知を契機に～
- 4 意見交換者（五十音順、敬称略）
阿部 千秋 画家 あべ くるみさんの母
池田 樹生 中京大学 スポーツ科学部 4年生
川崎 純夫 （一社）愛知県知的障害児者生活サポート協会 理事長
佐藤 圭太 トヨタ自動車(株)
鈴木 盈宏 （公社）スペシャルオリンピックス日本・愛知 理事長
藤田 紀昭 日本福祉大学 スポーツ科学部 学部長

【知事】 皆さん、こんにちは。愛知県知事の大村秀章です。

本日は、お忙しい中、そしてまたお暑い中にもかかわらず、この知事と語る会にご参加をいただきまして誠にありがとうございます。

この会は、県の施策を推進する上で、それぞれの分野の第一線で活躍をされている方々から直接ご意見をいただいて、今後の県の施策の実行に役立てていこうという趣旨で平成23年度、私が知事になってから開催させていただいております。

今日は、「スポーツ大会等を通じた障害者の社会参加」をテーマに開催させていただきます。というのも、今年の9月、スペシャルオリンピックス2018夏季ナショナルゲーム・愛知大会が9月22、23、24日に行われます。これは、知的障害のあるアスリートの方に全国から約1,000名お越しをいただき、ボランティア関係、サポーター等々で5,000人から6,000人、あと見に来ていただく方がほしい1万人ということで、1万5,000人から6,000人ぐらいの大変大きな大会になります。しかも4年に1回ですし、スペシャルオリンピックスの世界大会が来年アブダビであります。その日本の代表選考会も兼ねているので結構盛り上がるんじゃないかと思えます。そういうこともありますので、ぜひこのテーマにということで今日はさせていただきました。

そして、もう一つ、愛知県では障害のある方の作品展、芸術祭として「あいちアール・

ブリュット展」を平成26年度から県単独ですとやっておりまして、その2年後、平成28年の12月には「第16回全国障害者芸術・文化祭あいち大会」というのを開催させていただきました。また、29年度にはその成果を継承いたしまして、舞台・ステージ発表や講演会を充実させた「あいちアール・ブリュット障害者アーツ展」、美術展だけじゃなくて、舞台芸術とかステージ発表といったものも含めてやらせていただいております。今年も9月20日から24日に開催しますので、全国から来ていただいた方にまたぜひご覧いただければありがたいなと思います。28年度の全国大会では、愛知県の関係者の出展がやたらと多かったというか圧倒的に多くて、大変喜んでおります。

ちなみに、アール・ブリュット展を始めましたところ、28年度から、障害者の方が絵を描くことを仕事として企業さんが雇っていただける方が出てきました。こういうアートを銀行の封筒とかティッシュペーパーとかクリアファイルとか、企業さんのグッズにしてどんどん売っていただける、活用していただける企業さんが十何社できまして、そういったところの広がり、いわゆる絵を描く障害者の方を正社員として雇用していただくというのがもう今8人ぐらいになりましたでしょうか。全国からそういうやり方があったのかということ、どんどん全国に広がっていきそうな雰囲気がありまして、そういう意味ではぜひそういった形で広げていければと思います。

また、東京2020オリンピック・パラリンピック開催に向けて、今後全国で、ますますスポーツや芸術・文化活動に対する機運が盛り上がってまいります。愛知県でも、障害の有無にかかわらずスポーツや芸術活動をどんどん盛り上げて、この地域を元気にする取り組みを行っていきたいと考えております。

なお、私、今日ほんのさっき札幌から帰ってきたんですが、昨日、今日の午前中で全国知事会がありまして、東京オリンピック・パラリンピック競技大会会長の森喜朗元総理にお越しいただいて意見交換をさせていただきました。私が森会長に申し上げたのは、これまでのオリンピック・パラリンピックでは、ロンドン前ですけど、メダリストにメダルとあわせてビクトリーブーケという花束を渡していたんですね。それが2016年のリオのときはなくなりましてね。要は、1日置くと花束が結局、廃棄物になるという話があって。我々としては、愛知県は日本一の花の生産地でありまして、花束が廃棄物だと言われるとちょっと我々は立つ瀬がありません。

日本の花は、生産から美しさ、その栽培技術も含めて世界一の技術でありますから、ぜひ日本の花をこのスポーツ大会にあわせて使ってほしいということを強く申し上げたら、

これはしっかり検討しますということでした。そんなことも今日ありましたので、またしっかりやっていきたいと思います。

いろいろ申し上げましたが、今日は障害者スポーツや芸術・文化活動などの分野の第一線で活躍しておられる方々、またそれを支援する方々にお集まりいただきました。皆様方の日々の活動内容や普段感じておられることなどをお聞かせいただきまして、その中からスポーツやアートなどを通じた障害のある方の社会参加の促進に向けて、新たな気づきやアイデアをたくさんいただければと考えております。ということでございまして、今日は何とぞよろしく申し上げます。

なお、これはユーチューブライブで配信されておりますので、多くの方にご覧いただけるのではないかと思います。またぜひ忌憚のないご意見というか、率直にいろいろおっしゃっていただくとありがたいなと思います。

なお、台風が接近しておりますけれども、今日は非常に暑いと思います。私も上着をとりますので、どうぞ皆さんも上着をとっていただいて、ごゆるりにご歓談いただけたらありがたいと思います。

以上、簡単でございますけれども、語る会開催に当たりまして、私から趣旨とご挨拶を申し上げさせていただきます。今日は何とぞよろしく申し上げます。

ありがとうございました。

【知事】 それでは、まず順番に今日ご参加いただいております6名の方それぞれに、5分間ぐらいを目途にいたしまして、ご自身の日ごろの活動内容や、活動を通じて障害のある方の社会参加の促進に必要と感じておられることなどをお話しいただきたいと思います。その後に、いただいたご意見を基にして、また皆さん全員でフリートーキングをしていただきたいと思います。

それでは、まず最初に、鈴木さんからお願いいたします。

【鈴木】 スペシャルオリンピックス日本・愛知の鈴木と申します。どうぞよろしくお願いいいたします。

まず、スペシャルオリンピックスって何だろうかっていうことです。障害者スポーツというのはたくさんありますけれども、その中で知的に障害のある人たちがスポーツを通じて社会に参加してもらおうということを支援している国際的な組織であります。

今、世界では170か国以上がこのスペシャルオリンピックスの活動をしております。それ

に関わるアスリートが420万人ぐらい今現在活動しています。そして、それに伴うボランティア、あるいはコーチの人たちも100万人以上が活動しております。

この日本ではどうかといいますと、日本には知的障害のある方が統計では80万人ぐらいと言われておりますけれども、知的障害者は年々増えておりまして、今では100万人を超えているのではないだろうかということもわれております。

そんな中で、実際に日本の中でこのスペシャルオリンピックスの活動に関わっているアスリートは8,000人くらいです。その8,000人が今こういった活動をしているわけですが、この愛知はどうかといいますと、約200名の方が今アスリートとして通常トレーニングを行って活動しております。そういったことで、このスペシャルオリンピックスそのものをもっともっと皆さんに知っていただいて、知的障害のある人にとにかくもっともっとスポーツを楽しみながら社会に参加してもらおうということで、一生懸命啓発活動をやっております。

もともとこのスペシャルオリンピックスができた経緯ですけれども、元アメリカ大統領のケネディさんの妹さんが、知的障害のある人たちがスポーツができるのにスポーツをしていないということから、自分の庭を開放してサマーキャンプをやったというのが起源です。それが1962年ぐらいに行われたんですけど、それからどんどん広がって行って、先ほど言ったような170か国以上がこういったスペシャルオリンピックスの活動をするようになりました。

日本は、細川元首相の奥さん、細川佳代子さんがアメリカへ行かれたときにこのスペシャルオリンピックスと出会って、これはいいことだから日本でも広めたいということで日本で啓発活動をしました。そして、この愛知も1992年、1993年ぐらいから、細川さんの影響で何とか組織化しようということで、一グループとして動き出したというのが愛知の経緯です。

そんなことで、今ではかなり知名度も上がってきたんですけども、日本でのスペシャルオリンピックスの知名度というのは20%から30%ぐらいと言われております。パラリンピックの知名度はといたら、日本ではもう100%に近い人たちがパラリンピック知ってるよっていうふうに言われるんですけども、日本ではまだまだ知的障害のスペシャルオリンピックスの知名度が非常に低いということです。

アメリカではどうかというと、パラリンピック知っていますかというと、4割ぐらいの人が知っている。スペシャルオリンピックスはというと、もうほぼ100%みんな知っている

ということで、アメリカではスペシャルオリンピックスはすごく知名度が高いということで、ほとんどの企業からスペシャルオリンピックスに寄附していただいている状況であります。

私はOBになりましたけれども、もちろントヨタ自動車も、アメリカのトヨタでは全面的にスペシャルオリンピックスに協力しているという実態があるんですけども、日本では全然やっていなくて、今回トヨタも応援しようということで今、一企業として応援していただいております。そんなことで、スペシャルオリンピックスは、いろんな企業、団体、個人の皆さんの寄附で賄っている団体であります。

そんなことで、我々もアスリートをもっともっと増やして、そしてより多くの人たちに社会参加してもらって、自立していただけるように支援していきたいと考えております。ということで、よろしく願いいたします。

【知事】 ありがとうございます。

今年9月のスペシャルオリンピックス愛知大会は、トヨタさんとデンソーさんからボランティアをたくさん出していただけるので開催できるということがあります。それで豊田市と刈谷市が会場に入っているということもありますので、またぜひよろしくお願い申し上げます。

それでは、続きまして、川崎さんよろしく申し上げます。

【川崎】 私、愛知県知的障害児者生活サポート協会という協会から来ました川崎といいます。どうぞよろしく願いいたします。

まず初めに、協会の紹介をさせていただきたいと思います。

愛知県知的障害児者生活サポート協会、大変長い名前ですが非常に言いにくいですが、上部団体は全国知的障害児者生活サポート協会というところに所属しております。知的障害の方と自閉症の方、そしてその保護者の方の生活の安定と福祉増進に寄与することを目的とした協会であります。

現在会員数は、愛知県で6,200人、全国で13万人の方が会員になっておられます。

普通傷害保険「生活サポート総合補償制度」というのを作りまして、病気やけが、入院などの場合に付き添い介護料や損害賠償等、さまざまな補償制度を通じて知的障害、自閉症者の方のサポートをしている協会です。

それとあわせて、4つの委員会をつくりまして活動しております。まず1つ目はスポーツ振興委員会というところで、フライングディスクの教室を開いたり、ダンスの教室を開いたり、そのような開催をしております。2つ目は、権利擁護委員会というのがありまして、

皆さんもうご存知だと思いますが、成年後見を受託いたしまして、現在30人を超える方の法人後見を引き受けております。3つ目といたしまして、研修等の委員会では、保護者を対象に研修会やら、機関紙を作って報告している委員会があります。最後4つ目が、先ほど来お話がありました文化活動委員会というところで、障害者の方のふれあいアート展を開催しております、今年で11回目になります。回を重ねるごとに応募される作品のクオリティーがどんどん上がっているのが現状でありまして、知事さんにはたびたびお忙しい中ご来場いただきまして、本当にありがとうございます。

また、ふれあいアート展は名古屋の電気文化会館というところで開催しておりますけれども、やっぱり愛知県は広いので、三河のほうでもそういったアート展ができないかなということをおもひまして、もう一つ私が携わっております愛知県知的障害者福祉協会という協会のほうで「ぼくらのアート展」というのを始めまして、豊川の桜ヶ丘ミュージアムという美術館で、今年で8回目を迎えることができました。

このような取組もあって、先ほど来お話がありました愛知県さんが主催しておられます「あいちアール・ブリュット障害者アーツ展」の事務局もさせていただきまして、大変光栄に思っております。あいちアール・ブリュット展も今年で5回目を迎えて、先ほども紹介ありました9月20日から今年もやる予定になっております。

また、これも先ほど知事さんから詳しく説明があったんですけども、障害のある方のアート作品が非常に素晴らしいということが社会的にどんどん認められておりまして、企業のノベルティグッズということで、デザインを企業で封筒に使いたいとかティッシュボックスに使いたいということで、そういうことがどんどん広がっています。そして、アート展がきっかけで仕事として一般企業へ就職するということにつながっております、先ほど知事さんは8名とおっしゃいましたが、今は多分11名ぐらいになったと思いますけれども、それぐらい伸びております。

アート雇用は愛知県独自の取組で、愛知県さんと愛知県労働局、ハローワーク等が連携して実現した雇用制度でありまして、全国でも注目されている雇用制度であるかなと思っておりますので、これからどんどん広がっていくのではないのでしょうか。企業からも、とても評判がよくて、誰かほかにもいないのかとかいろんな問い合わせが今でも数件あるような状況であります。

好きなこと、得意なことを生かして仕事に就くことができ、ご本人さんもそうなんですけれども、ご家族の方も大変喜んでおられまして、今後も一人でも多くの方が社会人として

ご活躍されることを心からご期待したいと思っています。

以上です。

【知事】 ありがとうございます。

そうですね、もう11人ですか。すごいですね。なかなか皆さんかわいらしい絵というか味のある絵を、芸術作品を作っていただくので、本当にほんわかほんわかしてきますので、ぜひそういった輪が広がっていくとありがたいなと思います。

それでは、続きまして、阿部さんよろしく願いいたします。

【阿部】 こんにちは。あべくるみの母です。阿部千秋と申します。

今日は、ジャンルを超えたというかスポーツの方、皆さんとお会いできるということで、きつと何か生まれるんじゃないかなと思ってわくわくしました。どうぞよろしく願いします。

まず、私の娘、あべくるみといいます。お絵かきが大好きな子です。こちらをご覧になりながらご紹介したいと思います。あと、私の後ろに飾っていただいた2つの絵、これがくるみの最近の絵になります。それでは、ご覧ください。

あべくるみです。今、いなざわ特別支援学校の高等部3年生、18歳、青春真ただ中。ただいま最後の夏休みを迎えまして、デイサービスでクッキングなどを楽しんでいる最中だと思います。この子は、生まれつきの脳機能の障害、自閉症という病気と知的障害を持って生まれてきました。

こうやって家で絵を描いています。家にはいろんな種類の水性ペンが500以上あると思います。あと油性の黒のマジックを使って、描きたいときに描きたいだけ自由に描かせています。絵が上手でかわいいねってよく言ってくださってアートを勧められたりもしましたが、主人がルールのない好きな世界は家でじっくりさせようよということで、家だけで描いています。それが多分今のくるみの伸びやかな絵につながったのかなと思います。

いろんな絵を描きます。線だけの絵であったり、その時代時代で、カラフルであったり、平仮名をモチーフにしたものであったり、いろんな絵を描きます。個展をすると、「何人の方の絵なの？」っていう言われ方をするときもあります。

このリビングにいた絵が外に飛び出します。そのきっかけは、くるみのデイサービスの理事長さんがくるみのプリントの文字を見て、「おもしろい字書くね、絵を描くの？」ということで、絵を見られた次の週にそのカフェで初めての個展を開きます。

これが、「たまごのあしあと」というカフェです。今日、偶然にも傍聴席に元担任の先生も来てくださりまして、先生の写真勝手に使っちゃいました、写っていますが。娘は描くことが好きなので、飾ってもらうことにそんなに興味はなかったんですが、自分の絵を囲んでお友達、そして先生方、今までの恩師の大好きな方が集まってくださった中にいたときは、そういった喜びをこの個展で感じることができるようになりまして、次につながる、親としても娘の表情で決めました。

こちらは2回目の個展ですが、毎年クリスマスイブから17日間やっております。愛知県、岐阜県の川沿いにあります「すいとぴあ江南」ですが、こちらは総合的な施設、スポーツ、宿泊、お風呂、カラオケ、宴会もできるところで、主人のスマホの待ち受けの絵を見た方が、ぜひ個展やったほうがいいよっていうので場所を押さえてくれたのがきっかけで、夫婦で何の知識もありませんが勉強をして開催してみました。すると、知らない方が通る廊下にギャラリーがありましたので、ここでの出会いが次へ次へと広がっていきました。

ここは、弥富にあります海南病院です。

こちらは、岐阜県可児市の「樹の萌ギャラリー」です。ここは、先ほどの「すいとぴあ江南」の隣りが岐阜でしたので、岐阜からの方がここでやるといいよっていうことで、紙の寄附をいただいたり、ギャラリーを押さえてくださいました。

中日新聞の方が来てくださりまして、愛知県と岐阜県で掲載されました。これを見て、また、くるみの絵のファンの方が広がったわけです。

こちらは、小学校の特別支援学級のときの同級生のエレクトーンをする自閉症の男の子と、その教室の方とコラボした、絵と演奏のイベントです。

その演奏に来てくださった名古屋市立大学の門間教授にお声がけいただいて、学会で冊子の表紙、裏表紙にしてくださいまして、こちらのほうでも個展を開かせていただきました。

これはごく最近、3月にありましたイベントです。三重県の有名な木工作家のご夫婦、異砂の加賀さんご夫妻とのコラボ展示です。こちらは、私の娘が音楽療法を名古屋芸術大学で受けておりまして、その伊藤教授から芸術のほうの西村教授に声をかけていただき、くるみの個展のポスターを大学に貼ってくださいました。すると、そのギャラリーのオーナーさんがそのポスター、たくさんの中からこの方の展示をしたいということで開催したという経緯があります。

この後、イベントに参加していきます。

先ほど知事も川崎さんもおっしゃいました「あいちアール・ブリュット展」に学校の先生からのお声がけで出したところ、こちらの「赤ずきんちゃんとお花畑」で賞をいただきました。左下の写真は知事と娘と私が絵で写っていますが、娘は自閉症、人とのコミュニケーションはおろか、緊張しますと夢中に絵を描きたくなるというところがありまして、受付を借りて絵を3時間描いておりました。知事も快く来てくださって、ここで撮影となりました。ありがとうございます。

これは2回目、2年連続ありがたいことに賞をいただきました。

そのあいちアール・ブリュット美術館・優秀作品特別展にも出させていただきました。

こちら、全国障害者芸術・文化祭あいち大会にも3か所ぐらい参加させていただきまして、三越栄のオークションもさせていただきました。

現在は愛知県信用保証協会リニューアルオープンの展示も、これは愛知県からご依頼いただきまして、川崎さんを通じてさせていただいております。ありがとうございます。

今までの個展の中で、来る人来る人が「絵は売らないんですか」「この絵はどこで売っていますか」ということを、見ず知らずの方からも言ってもらえたので、グッズの販売を思い切ってすることになりました。こういった形で販売を始めました。くるみの絵そのものに引かれた方たちの出会いから、個展、グッズ製作、そして絵画の販売も行うようになりました。

個展に関しては、発達障害自閉症、知的障害というのはほぼ出さずに、あえて出さずに、娘の絵を純粹に楽しんでいただくという観点からしまして、それが自然と絵に引かれた方から、後から障害児なんだねっていうことで、いい形でこういった経緯になったと思います。

愛知県にお願いしたいこと。子どものころから芸術に触れることができる場所が欲しい。知的障害者たちは、うれしいときも悲しいときも何もしてないときも声が出てしまう方が多いです。美術館やプラネタリウムなども退場になり、一生経験できない方もいます。障害を持っている人たちの作品展示が継続できる場所を設けて、魅力を発信し続けたい。そして、健常の方と接点が欲しい。

最後です。愛知県にお願いしたいこと。障害を持っている人たちの作品だけを展示する「アール・ブリュット美術館」を愛知県に造っていただきたいです。ここからいろんなことが発信できると思います。いろんなコラボができると思います。全国に7カ所あります。ぜひ愛知県にもお願いいたします。

以上です。

【知事】 ありがとうございます。

そうでしたね、最初的时候、一生懸命ずっと描き続けていたのを思い出しました。ありがとうございます。

それでは、続きまして、佐藤圭太さんお願いします。

【佐藤】 トヨタ自動車の佐藤と申します。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

僕は、陸上競技の短距離種目をやっています。パッと見だと健常者と変わらないですけども、右足の膝から下を病気によって切りまして、リハビリの延長で陸上競技を始めました。中京大学進学を機に愛知にやってきました、今トヨタ自動車に所属しながら競技をやらせていただいております。

リオの際にも大村知事から激励いただきまして、ありがとうございます。今も、2020年の東京大会、もう2年後に迫っておりますので、池田選手とともに切磋琢磨しながら競技をやらせていただいております。

私から意見といいますか、このようになってくれるといい社会になるのかなと思うところがありまして。

今回は障害のある立場として来させていただいているのかなと思うんですけども、私自身すごい程度の軽い障害ですので、ある意味皆さんたちと何ら変わらない生活はできているような現状なのかなと思うんですね。その状況で僕が障害だからどうこうと言うとなかなかイメージしづらいのかなと思うので、ぜひ皆さんに体験してほしいなと思っております。

僕の会社で大切にしている言葉で「現地現物」という言葉があるんですけども、会議室でただただ意見交換するのではなくて、現場に行ってみてどういったことが行われているのか、現場の声はどういうものかというのはぜひ聞いていただけたらと思います。現在でしたら、オリパラの機会にのっとなっていろんな競技を体験できる機会がすごい増えているのかなと思います。日常生活においても、僕たちが履いている義足を体験できるようなものがありますし、競技に使うレーサーも使うことができます。

もちろん競技だけではなくて普段の生活においても、普段の生活からパラの選手はそもそも始まっているのかなと思うので、ただ競技だけを一部切り取るのではなくて、生活のところからも見ていただけたらと思います。そういう意味で、ぜひ大村知事も目隠しをして1週間生活してみたりとか、車椅子に乗って1週間生活してみたりとかいうのをやって

いただくと、多分僕が言葉で発するよりも、自分事として何か腑に落ちる形で、障害のある人ってこういうところがなかなか生活しづらいのかなってというのがわかりやすいのかなと思います。恐らくこのカーペットも、多分車椅子の人だったら押しづらいと思うんですね。ふだん何気なく見逃してしまうものも、自分で実際体験してみて感じることで、これはよくないね、こういうことを改善しようかというのを感じられるのかなと思うので、ぜひ大村知事も、そして県の職員の皆さんも、体験したり自分が実際に当事者になってほしいと思います。そうすると、もっともっと本質的な問題のところが見えてくるのかなと思っております。

もう1点。競技者としての立場になってしまうんですけれども、障害者の社会参加ということで、ピラミッドの部分っていうのが、考えていきますと、恐らく障害者スポーツの推進というのは非常に大切に、ピラミッドの本当に底辺の部分をつくっていくところなのかなと思います。私たちは、どちらかという反対に上の部分にいるのかなと思うんですね。底辺とトップの両方をつなげていくのが大切なかなと思っております。

底辺の部分というのは、今県で取り組む環境づくりとかレベルアップのための指導者による実技指導の実施というのをやられていると思うので、そういう部分は引き続き行っていただけたらと思うんですけれども、強化というのはやはり東京が今1つの区切りになってしまっているのかなと思っております。

県からも2020年に向けての強化費、パラの選手は年間50万円いただいているんですね。それに伴って私自身、実際その強化費をいろんな形で使うことができまして自分の競技にすごい役立っているんですけれども、やはり東京が終わってしまった後どうなのかというのが私たちは今一番心配に思っております。東京が終わったらその強化費は一切なくしてしまって、その後は自分たちでもうちょっとトップのほうになるように頑張ってくださいになってしまうのか、そうではなくて、2026年のアジア大会まで強化を引っ張っていくのかっていうのは、どういうスタンスなのかなというのは少し伺ってみたいと思っております。

もちろん底辺の部分、トップの部分、両方が伴って大きな形のピラミッドになっていくのが理想的なのかなと思いますので、今後そういうことができたかなと思っておりますし、やはり強化費に関しましても、例えば瑞穂の競技場が愛知大会のメインになると思うんですけれども、そちらのほうも、本当にトップの人にやるというのも大切なかなと思いますし、一般の方々がどのような形で使っていけるのかというのもすごい大切なかなと思

っております。

海外遠征をしてすごく印象に残っているのが、僕たちが海外の試合の競技場で練習しているときに、子どもたちが普通に体育の授業のような形で遊んでいるんですね。で、老人の方が普通に歩いたり、いろんな方が競技場を使って純粋にスポーツを楽しんでいる現場というのが海外に行くときによく見受けられましたので、愛知大会を契機に、ただただトップや底辺と分けるのではなくて、同じ場を共有できるような競技場があってくれたらなというのはやはり競技者として一番思いますので、そういうところを考えていただけたらなと思っております。

以上になります。お願いいたします。

【知事】 ありがとうございます。

おっしゃるとおりだと思います。

1つだけちょっと私からも申し上げますと、2020年の東京オリンピック・パラリンピックが1つの当面の大きな目標なので、我々はしっかりと選手強化も含めてやっていきたいと思いますが、我々にとっては、この愛知にとってはやはり2026年のアジア大会もそれと同じかそれ以上の大きな目標なので、それはしっかりと見据えてやっていきたいと、そのことは申し上げておきたいと思っております。

ありがとうございました。

それでは、続きまして池田樹生さん、よろしく申し上げます。

【池田】 中京大学スポーツ科学部4年生の池田樹生です。よろしく申し上げます。

私は、先天性で手足に障害を持っておりまして、佐藤選手と同様に右足が膝から下が切断されておりまして、左手の指が3本と右手が指1本という障害を持っております。パラリンピックで活躍されている選手の写真を見て競技を始めたんですが、高校から本格的に陸上競技を始めまして、その後、中京大学に佐藤選手が当時いらっしゃったので、その背中を追いかけるように僕も中京大学に入学を決めまして、今現在4年生として競技活動をしておりまして、もちろん2020年東京パラリンピック、その後の2026年アジア大会に向けて努力しております。

僕の今回の発言は、競技者としての意見になってしまうのでかなり特化したものになってしまうかもしれないですが。

まず、先々月ほどに愛知県の強化指定選手として認定していただいて、大変光栄に思っております。その際にいただいた強化費の使い方について、今自分の中でちょっと葛藤し

ている部分がありまして。

というのが、強化費をいただくに当たって、その使い方がかなり制限されているというのが現状でして、実際にふたをあけてみると、僕ら義足や装具を使うに当たって、その強化費の中で20万円まではそういった装具に費用を充てていいよということを言われているんですが、実際に私たちが競技現場で使っている道具は、とてもじゃないですけど20万円で購入できる道具はかなり限られているのが現状です。

今実際に僕が義足をつけるための、皆さんの感覚でいう靴下みたいなものを履いているんですけど、それも1つ5万円ほどするんです。皆さんが実際に生活している中で靴下に5万円かけますかといったら、多分かける人って本当にいないと思うんですね。もっと言えば、僕らが実際に履いている競技用の義足は、足を入れる部分だけで60万円ほどしたりとか、また最近CMとか番組で取り上げられることが多い競技用の義足のバネの部分も、本当に物によってピンキリですけど50万円ほどしたりするので、そういう強化費の中で賄える金額ではないというのが現状で、実際に競技として使っているという部分を考えていただいて、もっと自由に、制限を取っ払っていただけたらなと思っております。

また、先ほど佐藤選手からもお話があったとおり、今僕らが出場する大会がかなり国内でも限られているのが現状でして、国内のパラの大会が片手で数えられるほどしかまだ開催されていないというのが事実です。2026年の愛知のアジア大会開催に当たって、競技運営をスムーズにするためにも、年に一度でもいいので、せっかく名古屋にはパロマ瑞穂陸上競技場というすばらしい競技場があると思いますし、ほかのスポーツのスタジアムとか競技場もかなり愛知県は整っていると自分自身も感じておりますので、そういった会場をもっと利用して、僕ら障害を持った選手が参加できるような大会を開いていただけたらなと思っております。その中で良かった点とか課題になる点をどんどん見つけていって、2026年のアジア大会につなげられれば、一番いい形でこの愛知県でアジア大会を迎えることができるのかなと個人的に感じておりますので、そういった点を考えていただけたらなと思っております。

以上になります。ありがとうございました。

【知事】 ありがとうございます。

予算の件については、検討させていただければと思っております。

佐藤さんと池田さんは同じ短距離で、池田さんのほうがちょっと長いんですか？同じですか？

【池田】 はい、障害のクラスは同じになります。

【知事】 100メートル、200メートルで、記録持っているのは400メートル。

【池田】 はい。

【知事】 リレーは100メートルに出てるんですね。

【池田】 そうですね。今は短距離の種目をやっております、短距離種目でも100メートル、200メートルで、400メートルを今までやっていたのですが、東京パラリンピックの種目で僕のクラスの400メートルがなくなってしまったので、僕は競技種目を100メートルに変更しています。

【知事】 それでは、お二人はライバルなんですね。

【池田】 そうですね、はい。

【知事】 お二人で、切磋琢磨して頑張ってください。

【池田】 ありがとうございます。

【知事】 ありがとうございました。

それでは、藤田先生お願いします。

【藤田】 こんにちは。藤田でございます。よろしくお願いします。

パワーポイントを使って説明していきたいと思います。

まず、私はこれまで障害者スポーツの研究を23年間やってまいりました。障害者スポーツの推進とかを中心に研究してきたんですけども、現在はパラリンピックのレガシー、パラリンピックの後に何が残るかというところを注目して研究しているところです。こういった研究を基にして、スポーツ庁なんかの会議でも発言させていただいております。

一方で、ボッチャという最近非常にメジャーになってきた競技があるんですけども、普及、強化を2000年から愛知県で行っております。愛知からパラリンピックの選手も出ておりますし、この間日本選手権の予選が行われたんですが、愛知はかなりいい成績を残しております。本戦でも非常にいい成績が期待されるのではないかなと思っております。昨年は知事と一緒にこの県庁でボッチャを楽しませていただきました。

私の夢は、温泉卓球ってございますね、あれを全部温泉ボッチャにしていきたいなど。おじいちゃんおばあちゃんとお孫さんが一緒にできる競技ですので、ぜひそういった形でも普及できればなと考えております。

今回スペシャルオリンピックスがあるということですけども、パラリンピックとかスペシャルオリンピックスの大会を開催するだけで全てがよくなっていくということではな

いと思っております。大会を契機として、ビジョンを持って長い目で計画的に障害者スポーツの推進をしていく必要があるかなと思っております。

その障害者スポーツの推進をしていくことで何がいいのかということですが、まずはよく言われている、パラリンピックの目的でもあるんですけども、共生社会が実現できるということがあると思います。

1964年のパラリンピックのときには、日本で障害のある人がスポーツをやること自体があまり考えられていなかった時代。それが終わってから今の日本障害者スポーツ協会が作られ、障害者スポーツセンターも作られるようになって、さまざまな大会が行われるようになった。それだけではなくて、障害のある方の雇用とかりハビリ、車椅子なんかの進化もあったと言われています。1998年の長野大会のときには、パラリンピックという存在自体が多く国民に知られたということがあります。そして、リハビリというよりはスポーツとして認識されるようになってきたと言えます。この次のシドニーの大会から、新聞の紙面でいくとパラリンピックの記事がスポーツ面に載るようになってきたんですね。割合として増えてきたということがあります。そして、2020年パラリンピック、ぜひ共生社会を実現させていきたいと思っております。

さらに、人々の意識が変わるということです。この図をご覧ください。

これは、障害のある人に対するイメージがどうなのかということですが、障害者スポーツを見たことがある人とない人を比べています。点数が高いほどポジティブな、肯定的な意識を、イメージを持っているとご理解ください。そうしますと、メディアでも障害者スポーツを見たことある人のほうが障害のある人に非常にポジティブなイメージを持っているというのがわかります。

これは、障害者スポーツを体験したことがあるかどうか。先ほどもいろんなところで体験したほうが良いというお話もありましたけれども、これを見ても、やはり体験したことがある人のほうが非常に意識が高いということになります。障害者スポーツが推進されることによって人々が見る機会が増える、そういったことで意識も変わってくるということがあります。

さらに、スポーツ自体が変わっていく。最近はスポーツ界でも体罰の問題とかさまざまなハラスメントの問題が言われております。ただ、障害者のスポーツを指導するのにそれはあり得ないんですね。一人一人違います。佐藤さんと池田さん、同じクラスだけれども全然障害の中身が違うし、そうすると走り方も教え方も違ってくる。指導するほうは、一

人一人を見て、その人に合った指導をしなくてはいけない。一人一人に合ったというところで、これは実は障害のない人も同じです。そういったところから、教え込んでできない人を叱るというスポーツの指導ではなくて、一緒に考えながらスポーツ指導していくという指導に変わっていくのではないかなと考えております。

障害者スポーツの推進の鍵です。

青いほうを見ていただくと、これは先天的あるいは幼少期に障害を負った方のパターンですけれども、こういう方は必ず学校に行きますので、特別支援学校の先生とか、あるいは普通学校に行っている特別支援学級の子たちに教えている先生が障害者スポーツに関する知識とか教え方、指導を知っておく、これが非常にポイントになります。

それから、後天的に障害を負った人、これは必ずリハビリを通りますので、最終的に直接そういった患者さんと接する理学療法士さんとか作業療法士さんとかが同じような知識、あるいは情報を持っている必要があるということになります。

そして、両方に言えることですが、そういった障害のある人のスポーツの普及とか選手発掘、育成・強化といったことを考えると、地域の中でさまざまな団体が連携していくことが必要になるかと思えます。詳しいことは、また時間があれば後でお話ししたいと思えます。

こういったことを踏まえて、愛知県に提言を幾つかしていきたいと思えます。率直にしておっしゃいましたので、率直に言わせていただきたいと思えます。

まず、いろんな連携をしていくに当たっては、スポーツ関連部局がやはり1つになったほうがいいのではないかなと。そういったことで地域の連携がとりやすいし、障害のある人のスポーツとない人のスポーツが一体化した施策を進めやすいということがあります。東京、福島、神奈川、滋賀、福岡、鳥取、佐賀では、既に知事部局にスポーツを取り組む、障害者スポーツ、障害のない人のスポーツを一緒に推進していく部が設けられています。ただ、それを設けたからといって障害福祉の関係のところと関係なくしていいのかということではなくて、やっぱり連携が必要ですので、こういうものができたとしても福祉関連部局とは連携が必要になってくるということが言えるかと思えます。

そして、障害者スポーツ協会をぜひ立ち上げていただきたいと思えます。独自の組織として存在していないのは、実は高知、神奈川、政令都市でいくと神戸、そして愛知だけです。ただ、高知、神奈川は障害者スポーツセンターを持っておりまして、そこが中心になって推進していくことができます。神戸市も同じです。愛知だけそれがない状況です。現

在は社会福祉協議会の福祉生きがいセンターというところが中心になって推進していただいているんですけども、非常に少ない数の職員の方で一生懸命やっている。異動がありますから、異動するとそこまでのノウハウとか知識が全部なくなってしまうということがありますので、ぜひ。

そういった意味では、愛知県は一番この障害者スポーツを推進しにくい体制をとってしまっているというところがありますので、この障害者スポーツ協会の立ち上げをぜひ考えていただきたい。そうすることによって、予算編成が独自にできたりとか、資金も集めやすかったりとか、ほかの組織と連携しやすく、人材育成がしやすいということがあります。ぜひこれをお願いしたいと思います。

そして、先ほど学校の先生がっていうお話をしました。私たちずっと、体育の教員になるのにぜひ障害者スポーツの授業を必修にしてほしいということを訴えているんですけども、これは教職員免許法を変えなくてはいけないのでなかなか難しいところがある。それでも一生懸命やっているところですけども、愛知県で例えば体育の教員を採用するときに、「障害者スポーツの単位を取っていることが望ましい」ぐらいの一言をつけてもらえると、生徒にとっても先生にとっても非常に幸福なこととかありがたいことになるんじゃないかなと思っています。

そして、県の障害者スポーツ推進ビジョンをぜひ作っていただきたい。先ほど池田さんからありましたけれども、各種障害者スポーツの大会を誘致していただきたいということです。アジアパラでもまだやるって決まってないんですかね、確か。というふうに伺っているんですけども、アジアパラゲームは、もともと日本で開催が始まったフェスティックというものがもとになっております。1975年に第1回が行われています。それがずっとあってアジアパラゲームになって、中国、韓国、そして今年インドネシアのジャカルタで行われます。そして2022年が中国、26年愛知ということになっているんですが、ここまでやってきたパラゲームを日本で途切れさせるといっているのではないかなと思っています。日本発祥の大会をぜひ今後とも続けていくような、その中でビジョンを作り、障害者スポーツの推進を進めていっていただきたいと思います。

以上でございます。

【知事】 ありがとうございます。

貴重なご提言をいただきましてありがとうございます。しっかり検討させていただければと思います。

それでは、1巡いたしました。どなたからでもということより、皆さんのお話をお聞き
いただいて、さらに追加でといますか補足でといますかご発言あるかと思いたすの
で、また鈴木さんから順番にご発言いただければと思います。よろしくお願いします。

【鈴木】 今スペシャルオリンピックスで一番これからこうしたいなと思っていること
は、やっぱりアスリートをもっともっと増やしたいということですが、アスリート
がなかなか増えないというのか、まだまだスペシャルオリンピックスといった団体がアス
リートを募集してこんなことをやっているんだよということを知らない人が多いです。

我々NPOとしていろんなところで啓発やっているんですけども、年間本当に少ない数し
か増えていないのが実態で、また途中でやめていかれる人もいるしということで、もっと
もっとたくさんの人を増やしたいなということで頑張っているんですけども、やっぱり
民間では限界があつて。これからはコラボレーションの時代ですから、いろんな団体と協
力し合つてアスリートをもっともっと増やしていくと同時に、コーチ、ボランティアも増
やしてということこれからやっていきたいと思っております。

実際に、川崎さんのところもそうですけれども、例えば育成会とか親の会とかいうのが
たくさんあるんですけども、そんなところに我々民間の担当が窓口に行つてもやっぱり
なかなか理解がいただけないというのが過去にもございました。もっともっと一緒になつ
てやるという考え方で広めていくといいなということで、今回のナショナルゲームを機に、
やはり行政、つまり愛知県とか刈谷市とか豊田市とかそういった行政も支援していただい
ている、あるいは企業も、こんな企業が応援していただいているということを知ってい
ただくことによっていろんな方の信頼というものが発生しますので、そんな意味でもやっぱ
りいろいろなところとコラボレーションをして、いろんなところから協力をいただいて、
広めていただきたいなと思っております。ということで、今の愛知の課題としては、アス
リート、ボランティア、コーチをもっともっと拡大していきたいと思っております。

そして、今現在愛知でやっているのは、名古屋地区と刈谷で、あるいは豊田で一部やっ
ているような日常のトレーニング、それをやはり今回、豊橋、東三河のほうでそういった
拠点を1つ作ろうということで今取りかかっている事実があります。と同時に、やっぱり名
古屋の西部のほう、一宮であるとかそちらのほうだとかいろんなところに、1つのサテライ
トじゃないですけども、そんなものを設けていきたいなと思っております。それを、今
回のナショナルゲームを機にいろいろな団体との協力で進めていきたいなと。

特に今回のナショナルゲームについては、ライオンズクラブさんに強力な応援をしてい

ただいております。ライオンズクラブは全国組織ですので、そういったところの協力をいただきながら、愛知県内のいろんなところでスペシャルオリンピックスのトレーニングができるような環境を作っていきたいなと思っております。

以上です。

【知事】 ありがとうございます。

またこれからもよろしく願いいたします。

続きまして、川崎さんお願いします。

【川崎】 まず結論から申しますと、あいちアール・ブリュット美術館をぜひ造りたいなど。それは、先ほど阿部さんが最後におっしゃってみえた、ちょっと驚きました。何の打ち合わせもしてないのに、同じことを考えてみえるんだなということであまり驚きませんでしたけれども。

ただ、私は、美術館をつかって作品を展示するだけではだめじゃないかなと思っているんですね。やっぱりアートを軸に共生社会というか、一般の方がいろいろ使えるような施設をつくっていかないと、作品展示だけでは多分あまり人も見てもらえないし、みんなが使えるようなものにならないんじゃないかなと思っています。

例えばカフェとか物販するとか、視覚障害の方がそこでマッサージをすとかあんまができるような施設を造るとか、それも一緒にコラボしながらやるとか。カフェも、今日県庁に行ったら阿久比のパーキングの、辻口さんと有名なシェフの方の写真が写っていましたが、そういう方たちと一緒にコラボして、いろんな方が利用できるようなカフェもできるといいのかなと思います。

ただ、運営がやっぱり大変になると思いますので、福祉作業所が経営すとか社会福祉法人みたいなところが経営することで、継続的なものになっていくのではないかなと思っています。その場を拠点としていろんな、先ほど芸能の話もありましたけれども、音楽フェスティバルをやるとか、そういったイベントがそこを拠点にできるといいのではないかなと思っています。

知事さん覚えてみえるかわかりませんが、5年ぐらい前に同じような話をしたら、「まだちょっと早い」とおっしゃったような記憶がありまして。確かに知事さんおっしゃるように、そのときはまだ全然こういった障害者の方のアートの実績がなかったんですけど、今これだけ愛知が障害者アートに関して盛り上がって、いろんな方が応援してくださっている中で、やっぱりあいちアール・ブリュット美術館みたいなものができることも

いいんじゃないかなと思っています。

集客というか人を集めるには街の真ん中がいいのかもしれませんが、障害のある方ってやっぱりゆったりと、さっき言った音楽フェスとかいろんなことをやろうと思うともっと広く、地方でもいいんじゃないかなと。私、勝手にいつも思っているんですけど、コロニーが閉鎖というか縮小気味にありますけれども、あそこがすごく僕いいなと思って。コロニーの有効利用にも、使えるととても今後いいのかなと。

先日、実はちらっと見学に行かせていただいたら、建物も確かに古いですけども、昔の造りですのもものすごく頑丈にできている。それをリニューアルというか直せばまだまだ使えるんじゃないかなと思いますので、ぜひ。1つの候補ですけども、そこじゃなくてもいいですけども、そういったことを拠点に、先ほど申しましたように、アートを軸に共生社会、一般の方も足を運んでもらえるような仕組みを考えて、ぜひあいちアール・ブリュット美術館の実現に向けてできないかなと思っていますので、よろしく願いいたします。

【知事】 ありがとうございました。

5年前、そういうこと言いましたかね、私。ただね、確かに、ちょうど5年前、平成26年度からあいちアール・ブリュット展を県単独で始めたでしょ。頭にあったのは、滋賀県の北岡さんがね、彼も国会議員のときから一緒にというか非常に仲がいいので、いつも2月初めに大津でやるじゃないですか、アメニティーフォーラム。この十何年、今年の2月はちょっと行けなかったんだけど、ずっと出席してたんです。彼の事業所も国会議員のときに行ったんですよ、だからもう10年ぐらい前になるかな。彼が一生懸命アール・ブリュットやっていたので、よく知っていたので、そこを見にいった。要は、何もベースのないところでやっても、箱だけつくってもというのがあったので、まずはこういった形で積み重ねていったらどうか。

大津でやる2月のアメニティーフォーラム、いつも大津プリンスホテルを全部借り切って、その一角でアール・ブリュット展を延々とやっているでしょ。あれはすばらしいなと思ってね。彼らは、あれ7、8年前かな、パリに出したんだね、パリのモンマルトルの何かそんなところまで見に行ったんですよ、私が国会議員のとき。そんなのもあるので、ああいう形でしっかり活動が、ベースができてくるとあってもいいのかなということなのかなという気がします。

そして、今言われたように、ただ単に作品を展示するだけではダメですよ。いろんな

意味での、有機的に何か活動がされていくという形が必要ですよね。私としては、こういった形でやってきて大分ベースはできてきたかなという感じは正直していますので、また皆さんいろいろご支援いただけたらと思います。

すみません、いろいろ申しあげました。

それでは、阿部さんどうぞ。

【阿部】 愛知県アール・ブリュット美術館、決まりましたという気がします。ごめんなさい、そんな言い方はあれですが。

うちはたまたま障害名を出さずに、娘の絵を純粹に楽しんでもらいたいなと思って、ポスターとかDMとかに載せずに、絵を載せて開催したんですね。そうしたら何この絵っていうことで目に留まって、それを見た人は障害者とか先入観なく、通ったところに何か変わった絵があるよ、何か変、色が、こんなの見たことないっていうので立ち止まってくださったことから入った経験をしたので。その後、「あなたが描いてるの？」って言われて、「ここにいる娘です」というので、娘のちょっと不思議ちゃんのところを見て、そうなんだ、自閉症という障害があるんだというパターンで入ったので、やっぱり絵とか芸術ってルールや規則がなくてその人が感じるものであるので、すごくパワーがあるなと思って。最近、私の胸元にあるブローチ、これなんですけど、これは作業所さんというとちょっと古いイメージになりますけど、おしゃれなものをデザインして作ったのは障害のある方です。

うちも絵が売れないならグッズ作ってよって言われて、バックとかバッチとか。こういうのも置いておくと、「これどこで売ってるの？」って普通に聞かれたり、そういう感じを経験してきたので、美術館に来ていただいた方とかでも、絵が買えないからグッズが欲しいとか、気持ちが安らぐからこの人の作品を1個欲しいなとか、そういうところから、やっぱり美術館だと発信しやすいなというのをすごく思ったり。

今だと、障害があるのをそんなに表に出さずパルコで販売される障害のある方の作業所さんもいらして。格好いいので実際私も買いに行くんですけど、矢場町の駅から出てきて、通りすがりに「これかわいいね」とって女の子たちが群がって、障害がある人の物っていう形から入らずにいつているところがとっても、やっぱり芸術ってすごいなという実感があります。

美術館も、滋賀県のほうとか、古民家をちょっとおしゃれにして。カフェでも、格好いいから行きたいなというところから入ってもいいのかなと思ったり、いろいろとそういった場所があればコラボすることもできるし、発信できる。あと、健常者との接点も増える

ので、ぜひそういう形でできればなと思っています。

あと、佐藤さんとか池田さんとかが着るユニフォームとか、格好いい絵を描く人がいっぱいいるので、ダンっとなつけて、世界にボンっとな行ってほしいな。そうすると、一緒に羽ばたけるじゃないですか。もう夢いっぱいだなと思って皆さんのお話を聞いていました。

【知事】 ありがとうございます。

よくよくまたいろいろご相談させていただければと思います。

それでは、佐藤さんお願いします。

【佐藤】 先ほど池田さんと藤田さんからお話があったんですけども、義足の話と普及の話がやっぱり大きく関わってくるのかなと思っています。

今僕たちは競技用の義足を使って、いわゆる板バネ、スポーツ用義足を使っているんですけども、先ほど池田選手から50万円というお話があったんですけども、あれはやはり自費で買うものなんですね。一般的に僕達が普段履いている義足は社会的に生活するのに必要ということで保険が適用されるんですけども、競技用というのは趣味のものだよなという形で、全く保障されずに全て自費で購入するんですね。

私たちのように競技という形である意味サポートを受けられる選手はいいと思うんですけども、サポートを受ける前段階の場合、例えば子どもとか、それこそ運動を始めたいという子たちにとっても、運動しやすいスポーツ用義足は、それも趣味の段階だよな、自分で50万円で買ってくださってというのが現状です。

そういう状況ですと、イメージ的には足首とか膝を全部コルセットでぐるぐるに巻いて、それで体育やってくださいねみたいな感じなんですね。運動できなくはないんですけども、それでずっとスポーツを楽しめるのか、けがなくそれでできるのかというとなかなか難しいところがあると思います。

僕自身もやはりやっていく中で、高くて競技用を買えない義足を履いている子供たちに会う機会があったんですけども、初めてそういう義足を提供できる機会に居合わせたときに、競技用の義足を履いてずっと飛び回って走っていたんですね。その光景は忘れられなくて、この子たちが本当に運動とか社会で豊かな生活をしていくときに、現状ではやっぱり本当に自分が楽しめる、運動できるものが買えないこと自体がすごい障害なんじゃないかなと思う機会がありました。

そういう意味で、やはり現状では競技用義足っていうのは自費で全部、何十万円という

ものを買わないといけないですけれども、そうではなくてせめて義務教育の間までは何かサポートしていただける形があったら、もっともっと障害のある方たちがスポーツという形で社会参加できたり、自分がより豊かにできるのかなと思いました。

僕自身も、競技を始めたときに、本当にいい機会があってすぐに競技用の義足をいただいたんですけれども、もしそれがなかったら多分スポーツを楽しんでいる機会もなかったと思いますし、学校の体育ですらやはり嫌だなと思いつつやっていたと思うんですね。そういう機会があることってすごい大切なのかなと思っています。

障害の程度によったり、障害の例えばスポーツをやったり、阿部さんや川崎さんのやっているようにアートという形、いろいろあると思うんですけれども、障害の有無に関わらずに、自分がやりたいこととかチャレンジできる社会であるってやっぱりすごい大切なかなと思うんですね。健常者ができることと障害者ができることの差ってまだまだあると思うので、そういった部分、金銭的な面とか機会的な面とかいろいろあると思うんですけれども、そういうところがもっともっと縮まって障害者と健常者が近くなるような社会になっていくといいのかなと思っています。

【知事】 ありがとうございます。

貴重なご意見いただきまして、ありがとうございました。またしっかりと検討させていただきます。

それでは、池田さんよろしく申し上げます。

【池田】 佐藤選手が話されたと思うんですけど、僕も全く同じような意見を持っておりまして。競技をやる上でそもそもスタートラインに立つまでのきっかけがなかなかないというのが現状です。やはり費用もかかってしまうということで、スポーツを単純に楽しみたいというのに多額のお金がかかってしまうというのはかなり酷なのかなというのが現状なので、そういったことをなくそうという動き自体も都内でやっと今始まり出したというぐらいのことなので、もっともっとやっぱりこういった愛知を機に、愛知を拠点にそういった活動がどんどん全国に広がっていくといいのかなとは思っております。

また、先ほどの意見に追加ですけど、例えばアジア大会を名古屋で開催するに当たって、電車などで選手が移動されることもあるかと思うんですけど、実際に車椅子の選手が名古屋駅から競技場まで向かうってなったときに、階段とかそういった部分が出てくると思うんです。そういったところのバリアフリーっていうのは、本当に今この愛知県の名古屋は完璧なのかということももっともっと考える必要があると思いますし、あとは、選手の

道具の運搬だったりとかそういったところの状況も、今後連携という意味でどんどん考えていく必要があるのかなと思っております。

最後になりますが、阿部さんが先ほどいろいろコラボをしたいとおっしゃっていたと思うんですけど、僕自身もすごいアートに今興味を持っておりまして、義足のデザインとかそういった機会、今後子供たちにそういった義足を、貸し出しのような形でも、どうなるかわからないですけど、そういった場所があるのであれば、そういったところにアートであったりとか、義足に絵を描いていただくとかいったコラボもすごいおもしろいんじゃないかなと個人的に思いました。

以上です。

【知事】 ありがとうございます。

大変貴重な、また有意義なご提言をいただきまして、ありがとうございました。どういう形でできるか、よくよく検討できればと思います。

それでは、藤田先生お願いします。

【藤田】 先ほど申し上げたことと重なるんですけども、2点お話しさせていただきたいと思います。

1点は地域での連携ということ、2点目は教員の方が障害者スポーツに関する知識を持つとどんないいことがあるかというところをお話ししたいと思います。

まず1点目の地域連携というところですけども、学校へ行く前に障害を持った方は、先ほど言ったように学校を必ず通るんですね。ただ、特に知的障害のある方なんかは、学校を卒業した後、どこでスポーツができるかとかいったことがなかなか情報がないということ。スペシャルオリンピックスとかそういったところ、何かの形で情報があればそこに行ってみようかということになるかと思えますけれども、なかなかそれがなくて、卒業した後スポーツができないということがあります。それが、連携していくことによって、例えば総合型地域スポーツクラブのような地域クラブで受け入れがしてもらえたりとか、いろんなことが出てくると思えます。

それから、途中で障害を持った方であればリハビリですが、リハビリは実は、以前であれば長くリハビリをやって最後のほうでスポーツを体験して、これおもしろいから続けようかということができたんですけども、今は長くて半年と区切られているので、スポーツまで行き着かずに社会復帰していくことが多いです。

そういったときに、例えば医療機関と障害者スポーツ協会あるいはこちらの福祉生きが

いセンターのようところが連携して、ここに来ればこういうことができるからねという情報提供するだけで違ってくると思うんですね。ですから、そういったところの連携を、細かい連携ですけれども作っていくような施策が必要かなと。

2020年には、スポーツ庁の肝いりで「Specialプロジェクト2020」というのが行われます。これは全国の特別支援学校で必ずスポーツか美術か、そういったものに関するイベントを開きなさいというものです。今、これ、パイロット事業的に幾つかの県で行われています。私も愛知県でやってくれませんかって働きかけをしたんですけども、なかなか行政自体が縦割りになっていて、これをやるのに。実は教育委員会の特別支援教育課と保健体育スポーツ課と障害福祉課と3つにお話をして、でも、なかなかやっぱりそれぞれのところで進められなかったということがありますので、まず行政からそういう風通しをよくしていただいて、障害者スポーツを振興していくような体制を作っていただきたいということです。これが1点目。

その中心になるのが、先ほどお願いした障害者スポーツ協会という組織が中心になってそういった連携を作っていければなど。今も先ほど言ったようにあるんですけども、今やっている事業、全国障害者スポーツ大会への選手の派遣とか指導者の養成とか、ルーティン的なところで手いっぱいなんですね。なかなかそういった新しいところへ踏み出せないところがありますので、組織的な、組織上の改革をすることによってそういったことが可能になるのかなと思います。

2点目の教員の知識ということに関しては、今愛知県でもやっていますけれども、さまざま障害者スポーツの体験をやって、それをその後のスポーツ生活につなげていくということをやっています。これはオリパラが決まってから始まったんですけども、あるいは全国的なレベルでは選手の発掘事業というのをお金、すごく予算をかけてやっています。でも、そんなお金をかけたりとかわざわざしなくても、学校の先生がそういう知識を持っていれば、ここに行けばスポーツできるよとか、あそこに先生がいるからちょっと聞いてみればとか、ここに行けば障害のある子たちの指導をしてもらえるからという情報さえあれば、わざわざ発掘事業とかやらなくても、持続可能的に選手の発掘もできるし普及もしていけるということになると思うんですね。ですから、学校の先生にそういった知識をぜひ持っていただきたい。

第2期のスポーツ基本計画が今年の3月に出されましたけれども、その中でも学校種に限らず教員に対してそういう知識を普及していくということが書かれてあります。幸い今、

オリパラ教育ということでいろんなところで、愛知県も確かスポーツ庁からの予算をとってやることになっていると思いますが、そういった機会をどんどん増やして、学校の先生に障害のあるお子さんたちの指導の方法あるいはインクルーシブな指導の方法であるとか、一生涯の障害者スポーツに関する情報提供とかができるようにしてあげると、本当にいろんなこと、これもやらなきゃあれもやらなきゃっていうのを全部なくして、それだけで普及がかなり進むんじゃないかなと思っております。

特に親御さんは知らないんですね。お子さんをいろんなリハビリに連れていったりとか、家とそういったところと学校の行き来だけで、そこから新しい知識を、スポーツに関する知識を得るのはなかなか難しいところがあるので、そういったことも考えると、先生から親御さんに知識が伝わっていくことができるといいのかなと思います。

以上でございます。

【知事】 ありがとうございます。

スポーツ担当部局ということになりますと、もともと県の場合は教育委員会の体育スポーツ課というところがあったんですが、いろいろ全国の体制を研究というか、当然調査して研究しました。アジア大会、それから名古屋ウィメンズマラソンとかラグビーワールドカップとかフットサルのワールドカップ誘致とかをずっと手がけてやっていますが、そうしたことをやろうとした時にやっぱり教育委員会が所管する学校体育は、そういった大きな国際的なスポーツ大会にはなかなか合わないと思いますので、これは知事部局に持ってきて、振興部の中にそういったスポーツの部局を作って、進めています。いずれは、アジア大会は間違いなく国体よりもはるかに大きいので、外出しで、オリンピックの組織委員会に匹敵するぐらいの巨大なものを作ることに多分なるんだろうと思います。

というのは、やっぱりアジア大会もアジアパラも含めて、アジアはやっぱり経済的にもどんどん、中国、東アジア、世界の中でのウエイトがどんどん大きくなっているんで、スポーツも今年、来月ジャカルタとパレンバンでインドネシア大会がありますけれども、中国と日本と韓国と出てきますから、そりゃ世界のトップレベルの大会なので、そういうのはどんどん盛り上がっていく。

学校体育は教育委員会に置くことに法律で決まっております、ここに全部集められないかと思いましたが、それはダメだということで、知事部局にスポーツ部局は集めていこうと。

これは、東京都がそうなんです。いろいろ調べたら、東京マラソンをやるためだけに必死で作ったと。東京マラソンって、よく東京都心部の交通規制をして、開催し続けてい

るなと思いました。

確か障害者スポーツについては国のほうはもうまとめたんですね。

【藤田】　そうですね、スポーツ庁に入っていますね。

【知事】　今まで福祉の部局でね、それまでずっと厚生労働省がやっていたね。そういうわけにはいかないということで、もうまとめた。そういう方向なども含めて、そこはよくよく私ども検討させていただければと思います。

2008年の北京オリパラの後に、ちょうど私、厚生労働副大臣をやっております。総理官邸で北京のパラリンピックが終わった後の選手、メダリスト、入賞した選手が何十人、50人から60人いたと思いましたが、慰労会というか打ち上げのようなことをやっていた時に異口同音に言われたのが、もうこのパラリンピックはとにかく福祉の視点というか、片手間でやるようなことでは無理だと。みんな世界各国が国を挙げて選手育成をして、アスリート育成してやっていかないともう勝てないということを何人かの選手に言われて、そうかそういう時代なんだなというので、これはもう統合したほうがいいぞということも申し上げてきた経緯があるので、そこはよくよく、全くそれはおっしゃるとおりだと思いますので、またよく相談といいますか検討させていただければと思っております。

ありがとうございます。

2巡にわたりまして貴重なご意見、ご提言をいただきました。さらにまだ発言がある、これだけは言っておきたいということがあれば、また追加でどうぞ。どなたからでも結構です。

【鈴木】　知的障害者のスポーツということで、実際に皆さん知らない人が、例えばサッカーの試合を見たときに、健常者が見た限りでは知的障害者がやっているサッカーの試合はものすごい手ぬるいんですよ。見た目ではわからない、そのアスリート一人一人のプロセスをもっともっと皆さんに知ってほしいなと思います。

例えば、これは愛知のコーチから聞いたお話ですけども、あるアスリートがサッカーをしたいということで入ってくれました。ボランティアのコーチがついて指導するわけですけども、そのアスリートの子にボールを蹴って、そのボールを止めてほしいというトレーニングをしたわけです。

ところが、最初のころは、1か月も2か月も経っても、ボールを蹴ってそのボールがアスリートの前を転がっていても何の反応もなくボールが過ぎちゃったということが続いたわけです。コーチとしては、そのボールを止めるんだよということで一生懸命指導するん

だけれども、全然そこまで気が回っていないという状況だったんです。それが、2か月、3か月、半年ぐらいトレーニングを積んで一生懸命やったら、あるときにコーチがボールを蹴ったら、そのボールをそのアスリートが目で追いかけたんですね、目でボールを追いかけたというのがトレーニングの進歩なんですね。ですから、コーチも涙したということを知りました。

そういうアスリートがさらにレベルアップしていきながら、ボールを蹴ったら今度はそのボールを蹴り返してくれた。これもすごいレベル。ということで、一人一人のアスリートのやってきた過程を本当に皆さんが知っていたら、同じサッカーチームでスペシャルオリンピックスの選手が例えば試合をやっているのを見たときに、あいつが今蹴ったぞとかあいつがボールを止めたぞというだけでもすごく感動してしまう。これがやっぱりスペシャルオリンピックスのすごくうれしいところです。

陸上では、やはり100メートル、200メートル、400メートルという、もちろん競技はオリンピックと同等の競技を全種目対象にやっています。ある選手なんかは、1,500メートルの大会に出たとします。1,500メートル走り終わっても、止めない限りはすごい勢いでぐるぐる走っちゃうというぐらい力があります。100メートルでも8人で走って、もちろん1位2位3位と決めるんですけども、通常のオリンピックだと1位は金メダル、2位は銀メダルということで表彰するんですけども、スペシャルオリンピックスの表彰式は8人なら8人全員に表彰台に立ってもらって、それぞれにメダル、リボンをかけます。ですから1位から8位までみんな表彰します。

さらに、スペシャルオリンピックスで一番特徴的なのは、万歳ボランティアというのがあります。メダルをかけ終わった後に何百人のボランティアが一斉に万歳ってやるんですね。そうすると、そのアスリートが、表彰台の上でメダルを胸にかけながら、本当にすばらしい笑顔を見せて喜んでくれるんですね。それを見たときに我々、一生懸命スペシャルオリンピックスを応援してきてよかったなと喜びを感じるんですね。だから、もっともっとそういったことをいろいろな人に知ってほしい。

同じ大会も、例えば愛知から出た選手だけを応援するのではなくて、東京から来た選手でもこういうプロセスを持った選手がいるんだということをみんなが理解すると、スペシャルオリンピックスの競技大会っていうのは大会ではなくて発表の場ですから、全員を応援したくなるという、これがスペシャルオリンピックスの魅力です。

そういったことでアスリートも伸び伸びと社会で生きていく力をつけたり、あるいは他

県の選手とアスリートとも触れ合っただけで共有したり、それをお世話したボランティア、コーチ、そういった人たちもともに仲よくなって、いわゆる違いをともに生きる社会になっていくんじゃないかなということ、ぜひそういったプロセスをより多くの人に知ってもらう方法があったらいいなと思っております。

以上です。

【知事】 ありがとうございます。

よろしいですか。

【阿部】 私は、娘が、あいちアール・ブリュット展を開催して下さって賞をいただいたおかげで川崎さんやいろんなアール・ブリュットの方々と知り合ったり、同じ作家のお母さん友達ができて芸術の話ができたりと、そういった障害に関しても発信できる仲間がいて、団体があってということで、愛知県からも依頼を受けたりとすごく幅広く活動をさせていただけることになったんですが、一方で障害名から入らず出会った方たちとの出会いってというのは、障害名が後づけだったので、いきつけだと思ったのが、くるみの絵を好きになってくださったおかげで、「じゃあ、今度アール・ブリュット展に行くわ」と言って来て下さったり、とてもいきつけになった経験から、全然関係のない分野の方とコラボするのが一番わくわくするし、発信も強いんじゃないかなって思います。

鈴木さんがおっしゃったように、こんなすてきな若者たちがいるというのを発信するためには、例えば愛知県出身のスポーツアスリートにサッカーに参加していただいてそこから、その方が行くというので目に留まった一般の健常者の方がこういう世界があるんだというのを、やっぱりすごく接点でつなげてくれると思うんですね。

アートのほうも、私の自閉症のお子さんの友達が三重県と岐阜県にいまして、三重県の方はデザイナーの方が特別支援学校の児童生徒とコラボしたものを三重県の美術館に飾っていただいたことがあるとか、岐阜県も有名デザイナーとコラボした形をとられてそういう発信ができたというのでも聞いたことがありますので、愛知県もぜひ愛知県ならではのデザイナーさんやアスリートの方に、ぜひこの障害者っていうか、こんな世界があるんだという……。スポーツの楽しみ方も、スペシャルオリンピックスと普通のスポーツ、パラリンピックも違うかもしれないですけど、それぞれの世界を知らないのがやっぱり惜しいなというのはあるんです。

さっき佐藤さんが、知事、目を一週間隠してやってみてくださいっていう。ちょっと笑えちゃったんですけど、実はうちの娘は発達障害の自閉症というのがありまして、こだわ

りが次々とよくも悪くもあるんですね。うちの最大のこだわりが、目をつむって24時間暮らすということを高校1年生の秋から始めまして。それは、旅行先で入り口から敷いてもらったお布団まで目をつむって行けるかなゲームというのを1人でしていたんですけど、その数日後、学校に行くときから、おはようから目をつむって視覚を閉ざして生活をし出して、何となくそみたいですけど1年と22日目をつむる生活をしていました。さっきパワーポイントでご紹介した大村知事との写真、3つのうちの2つは目をつむって参加したので、目をつむって大村知事と写っているんです。

言葉が単語でしか言えないし、うまく理解は全てできないですけど、楽しんでやっていたというので。それは置いておいて、私は初めて目を閉じて生活する娘の世話を一緒にすることになるわけです。学校の先生も、くるみちゃんのおもしろいこだわりにつき合うよということで、ヘルパーさんも全てが、どうやったら目を開けるかじゃなくて、つき合おうという形をとってくださって、娘は1年と22日ぶりに満足して今度はまた旅行先で目を開けたんですけど、この2つがその後に描いた絵です。

とりあえず、私的に視覚障害の方の親の経験を1年と22日したわけですから。階段を降りるときも両手を持って降ろすとか、ここ段があるからこうしなきゃとか、トイレのスリッパを履くときでも目をつむっているのだから足に近づけてあげないとわからないとか、特別な経験をしまして、視覚障害の方の、テレビを、Eテレを通じてですけど勉強もして。やっぱりいろんな世界があるんだなと思って。佐藤さんのお話を聞きながら、私も佐藤さんや池田さんの経験はないので、どんなことがおもしろくてどんなことに困っているのかなとか、想像がすごい生まれてきて。

鈴木さんのお話は、うちの娘も知的障害があるので手にとるようにうれしい喜びを感じられる場なので、やっぱり想像力を豊かにしながら、関係者じゃない方を引っ張ってきていろんな世界をいろんな方が経験できるような形をとれるように、ぜひ何かやれたらなどいうのをすごく強く今日感じました。

ありがとうございます。

【知事】 ありがとうございます。

ほかによろしいですか。

【藤田】 念押しで、ぜひ障害者スポーツ協会の独立した組織として立ち上げるということ、ぜひ検討していただきたいと。

以上でございます。

【知事】 ありがとうございます。

それでは、予定しておりました時間も参りましたので、私から最後に一言だけ申し上げたいと思います。

今日は皆様に貴重なお話を、また貴重なご意見、ご提言をいただきまして、誠にありがとうございます。

スポーツ、また芸術・文化活動を広げていくことが障害のある方の社会参加、活躍の場を広げていくことにつながると思っておりますし、また、それを見ていただくことで本当にバリアフリーの社会をしっかりと作っていきけるのではないかと思っておりますので、引き続きこうした面でしっかりと取り組んでいきたいと思っております。

それでもって、まずは今年9月に、両方にポスターありますが、スペシャルオリンピックス2018の夏季ナショナルゲーム・愛知大会、そして同時期にあいちアール・ブリュット障害者アーツ展がありますので、全国から来ていただいた方に障害者アーツ展を見ていただければ、多分相当多くの方に関心を持っていただけるのではないかと、大いに期待したいと思います。その折にも皆さん、ぜひよろしくお願ひ申し上げたいと思っております。

佐藤選手、池田選手、2020年に向けて大いにご精進いただき、また大いに切磋琢磨していただいて、すばらしい、まずは東京のひのき舞台に立つため、国内大会を勝ち抜いていただき、大いに頑張ってくださいと思いますし、ぜひ金メダルを目指して頑張ってくださいと思います。

藤田先生も本当にありがとうございました。

いただいたご提言、ご意見、しっかりと受け止めて検討させていただいて、またしっかり前に進めていければと思っておりますので、引き続きいろいろご相談させていただきたいと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

今日は本当に有意義な機会となりました。心から御礼申し上げまして、私からの最後の一言、ご挨拶とさせていただきます。

ありがとうございます。

— 了 —